＋

２０２２年

３月第３・４週の主日礼拝説教要約

・３月２０日：ヨハネ福音書　１４：１-７.

「 神に至る道 」

・３月２７日：ヨハネ福音書　１５：１-１０.

「 実を結ぶ枝 」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

説教《神に至る道》

私は道であり、真理であり、命である。この言葉は、きわめて独立性の強い言葉です。人間の安易な解釈を受け入れない言葉です。ただ、メシアの秘匿が原則のイエスの態度と福音書の記述を精読してみると、ことヨハネ福音書の記述だけは、その他の福音書とは異質の内容が見て取れます。その中で神は、独り子イエスの言動を通して御自身をこじあけてでも、真実の開示に努めます。

神は自身の似姿として人を造り（旧約、創世記1:26以下）、最後にそれ自身となり（新約、福音書）、隔絶されていた神と人との世界を、みごとに接合する役目を果たし、地上に足跡を残し、また、言葉を遺します。

ただ、神と人とのあるべき関係を取り扱い説明書のごとく精妙に諭すのではなく（不可能を可能にするのではなく）、遠い昔、罪なき人間が、造り主と共に自然の中で暮らし始めた頃の関係に戻るための（永遠に生きるための）、近くて遠い道のりを示すのです。原文の“εἰ μὴ δι᾽ ἐμοῦ”すなわちち、「私によらなければ（＝but by me）」と直訳されるイエスの言葉は、道（ὁδός）に対応しつつ「通らなければ」と邦訳されますがこれは、イエスの上を踏絵のように通過することを意味しているのでもなければ、そこに唯一の狭き門が置かれているのでもありません。むしろ、イエスの名によって神に祈ることならこれに含まれます。英訳（but by me）と同様に原文も動詞（「通る」）ではなく、前置詞のみの表記となっており、多様な意味が含まれます。さらに、イエスと共に生きることから始まる、その道こそが真理と命に至る道であることを教えています。

実はこの一連のイエスの言葉は、愛弟子のトマスの問い掛けに対するイエスの返答として語られました。その答えこそ、神が人に示した大きなヒントとなっています。そこには、人となった神の子だけが、開示できる神と人の接点、さらに神に至る通過点が生き生きと語られているのです。言い換えれば、その道に進むとき、その真理を見出だすとき、その命を生きるとき、その人は神との接点に位置していることを悟るのです。

ただ、イエスに質問をした疑い深いトマス（ヨハネ福音書20:26）は、努力をして、ヒントを見出だしたわけではありません。この返答は一方的に神キリストから語られているのです。まだまだ、悟ることの遅いトマスに対して。それでもトマスは神に見出だされていたのです。

説教《味を結ぶ枝》

平和の種が蒔かれ、ぶどうの木は実を結び、地は実りをもたらし、天は露を降らせる。私はこの民の残りの者に、これら全てのものを受け継がせる。 ――聖書協会共同訳聖書 ゼカリヤ書8:12.

「この民の残りの者」とは、艱難を経て、既に補囚の地バビロニアからユダの地に帰還した者たちを指していると思われますが、全ては未了のこととして語られています。裏を返せば、受け継ぐはずのもの、すなわち滅亡前のエルサレム神殿を中心とした領域と信仰生活の現風景は、再建の目処が立たぬままに時が過ぎていたのです。

その実現には民族の総意が得られず、また、彼らの体力は失われたままの状態が長く続きます。

そんな時代に、民意の回復もさることながら、他方、メシアの到来の待望論が彼ら中に台頭し始めておりました。

娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。あなたの王があなたの所に来る。彼は正しき者であって、勝利を得る者。へりくだって、ろばに乗ってくる、雌ろばの子、子ろばに乗って。

――聖書協会共同訳聖書 ゼカリヤ書9:9.

民族の救いは「どこ」に求められるのか、という考え方が低調なときに、救いを「どこ」にではなく、「だれ」に求めるべきなのかという別の方向性が見えてきます。神殿(どこ)よりも、メシア(だれ)に期待をよせるほうが確実であると。

いわゆる小預言書のひとつに数えられる旧約のゼカリヤ書は、第1・第2・第3ゼカリヤに区分される3部構成（1~8章、9~11章、12~14章）となっており9章以下から時代がさらに下ります。

さて、イエスが3日で建てなおすといった後世の再建後の神殿(どこ)は、イエスの予言どおりにローマ軍に破壊し尽くされ(西暦70年)、そのかわりに、救いの源となっていたのが、死んで3日目に甦ったイエス御自身(だれ)の体だったことを思い出すと、錯綜する預言の成就における神のダイナミズムが、そこに見てとれるのです。その救いの源から生え出るぶどうの木の枝こそが、「実を結び…実りをもたらす」ものとな

るのです。神殿(どこ)は消滅します。しかし、イエス・キリスト(だれ)に連なる枝は、場所(どこ)を選ばず滅亡をまぬがれて、たわわに実り、救いの実を結ぶ枝となるのです。この枝にはぶどうの木の養分が行き届き、ますます大きな枝となり、古代の絵画にあるごとく、そこには神の国が出現します。

さて、今日でもワイナリーに行けば、一目で分かるとおり、ぶどうの木は接木をしても大きく育ち実を結びます。同様に、宗教の垣根を超えても、この木に連なる多くの異教徒がいたことは、歴史が証明しているとおりです。

ただ、もし一部のユダヤ人がその後も「どこ」で救われるべきかにこだわり続け、歴史上の彼らの入植地に食指を動かし、再び定住民らを追い出し、古代の国家の再興を試み、こともあろうに一部のキリスト教徒までが、これに賛同するならば、その時はイエス・キリストの父なる神の御旨とは違う何かが成就することになるでしょう。もし今の時代に、子なる神が、同じ試みを提示されたならば、毅然として、これをはねのけることでしょう。